対　話　的　生

宮　本　　桂（南山短期大学教授）

「主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった。」（創世記　２，７）

ミケランジェロは、シスチナ礼拝堂の天井に、この人間の創造の場面を描いて、左側に横たわる青年アダムを、右側に主なる神を配置している。本来動的存在であるはずの青年が横たわっている構図は何か奇異に感じられるのだが、かえって、次の新たな躍動を予期させるものがある。アダムは、いまだ立ち上がれず、神の方へ左手を差し出し、神に何かを期待しているようである。それに答えるかのように、神は右手を差し延べて、命の息をその指を通して与えようとしている。

創世記における人間の創造の解釈は、無論、「神の似姿」（創世記　1,26～27）を中心に色々試みられてきた。ヴェスターマンによれば、人間は神の対向者として造られたと言う。（注１）この神と差し向かいに生きる者としての人間の在り方をミケランジェロは巧みに描いたと言うことができよう。

現在、「対話」ということが、しばしば口にされてはいるが、その実態を洗い直してみると、各自が「対話」という言葉を、自分に都合の良いように勝手に解釈し、自分に利する限りにおいて、「対話」を求めているにすぎない場合が非常に多い。現代のアダムの指は、対向者に向けられているようでいて、実は自分に対して向けられているのであり、神がせっかく指を差し向けても、二つの指は触れ合うことがなく、従って、命の息は吹き込まれないのである。

M．ブーバーは、この悲劇的状況を示唆するかのように、次のように述べている。

おお、暗やみのなかの星のように孤独なあの汝の顔、
おお、鈍感なひたいのうえにおかれている生ける指、

おお、次第にひびき消えてゆく足音！　（注２）

以下この小論において、対話によってこそ生命を得、対話を通してこそ真に生きられると強調するブーバーの声に耳を傾けながら、人間とはいかに対話的存在であるかを考察してゆきたい。

Ⅰ　「いのちと対話」

「世界は人間にとっては、人間の二重の態度に応じて二重である。」
（『我と汝』５頁）

これは『我と汝』の冒頭の言葉である。ブーバーが問題にするのは、世界が存在論的にいかにあるかではなく、世界と関わる人間の態度、在り方である。Ａ．Ｊ．ヘシェルも述べているように、人間の最も重要な問題は、存在ではなく生きることであり、ブーバーのこのアプローチは、生の観点から存在を理解しようとする聖書的思惟の伝統に合致したものである。（注３）人間の世界に対する態度は、人間が語り得る二つの根元語に応じて二重である。根元語とは人間の基本的生の事実を指し示す表現である。その一つは「我－汝」であり、これは二人称的関わりを示すといえる。もう一つは、三人称的関わり方を示す根元語「我－それ」である。M．ブーバーは「我－汝」との関わりとは、全存在的関わりであり、直接的、相互的なもので、今・ここにのみ成立し、「真実の関係」「生きた関係」と呼んでいる。それに対し、「我－それ」の関係は支配し利用する関わり方をさす。全存在をかけてこの根元語を語ることはなく、多く、他動詞の領域で説明できる関係であり、所有の関係で代表される。

「あらゆる真に生きられる現実は出会いである。」（『我と汝』１８頁）

ブーバーはそこで、人間がより本来的に生きるとはどういうことであるかを問う。そもそも生命あるものとは、一般的に言えば、動くもの、成長するもの、繁殖するもののことであり、統一体をなしているものを指す。反対に、生命なきものは、成長せず、繁殖せず、統一をなしていない。そこで、人間が真に生きているとは、成長すること、発達すること、応答することと言うことができる。これは勿論、人間の生物学的事実についてではなく、人間の生き方の原理や価値について語るのである。これに対して死んでいるとは、成長を止めること、化石化し、物になることを意味している。（注４）ブーバーは出会いを通してこそ人間は真実の意味で生きることができると主張する。換言すれば、対話的生を通して人間は愛し、決断し、成長するのである。「我－それ」の関係では、人間は閉鎖的になり、＜もの＞と化すると言う。

「いのちの源－神」

このような考えの起源は聖書のうちに中心的教えとして見ることができる。聖書によれば、神こそいのちの源であり、「生ける神」（ヨシ3，10；詩篇42，3）への信仰こそが聖書信仰の中心である。太陽も月も星も被造物であって神ではなく、生けるものではないことが強調される。（創世記1～2）特に偶像と対比される「生ける神」は語りかける神、愛する神、命ずる神、救う神、対話する神である。

先にも延べたように、この生ける神から生命の息吹を与えられた人間は（創世記2，7）特別の意味で神の生命を生きるものとなった。神に対向し、答えるとき、人は生命にむかい、神から背き離れるとき、人は死に向かうのである。人間は神との交わりを通してこそ、より一層本来的意味で生きると言える。その上、G．ショーレムによれば、「人間を生きるものにしたという神の息吹が、人間に言語能力を与えた」と言える。（注5）人間の生きる者としての本質を作りあげるのは、まさに言語なのである。

「いのちと言葉」

このように見てくると、いのちと言葉は生ける神を通して一つになることが理解できる。「我であることと、我を語ることとは同一である」（『我と汝』6頁）と述べるブーバーは、語られる言葉のなかに「我」が現れると説く。ブーバーが言う言葉は聖書の伝統に基くもので、T．ボーマンによれば、「ヤーハウェの言葉（ダーバール）は力強さを表しはするが、むしろ神の深い意味内容の語りかけをしめす」（注6）ものである。創世記が語る命の息吹とは、神のいのち、即ち、神の精神であり、ブーバーに言わせれば「精神とは言葉なのである」（『我と汝』52頁）。イスラエルにおいて神の言葉は「決定的に動的な性格をもち、強い力を有していた。」（注7）このダーバールの力は語りかけられた人間を具体的に改造してゆき、「言葉はくりかえし生命となる」（『我と汝』57頁）のである。

「いのちを選べ」

「わたしは命と死および祝福とのろいをあなたの前に置いた。あなたは命を選ばなければならない。そうすればあなたの子孫は生きながらえることができるであろう。」（申命記30，19）

人間は生と死という基本的な選択をしなければならない。いのちは人間にとって最高の規範であり、神は生きており、人間もまた生きている。人間にとっての基本的な選択は、まさに成長か衰退かのそれである。

その場合人間は神の導き即ち掟に対する忠実さを求められる。神はイスラエルの民に契約と律法を与え、民はその生を通してそれに答えなければならない。いのちの得失は神のことばとの関わりにおいて決定される。正しい者は生きる

のである。

このように、預言者の時代にあっては、創造における人間への生命の移植の表象は後退し、神のことばへの聴従に、いのちの現世での獲得と喪失がかかっているとの一点に集中されている。（注８）もっともそこでは掟に対する忠実のみが強調されたのではなく、詩篇も歌うように、神の面前で神をたたえながら過ごす一日は、「よそでの千日にもまさる」（詩篇84，11）のである。預言者たちは、神の探究が命につながると喝破する。（注９）

このように、いのちは神との対話にこそ、その起源を有し、神との対話を通してこそ、生き続けることができるのである。それでは、この対話的生き方とはどのような生き方を言うのであろうか。

Ⅱ　対話的生

「対話的な生とは、ひとびとと多くの関わりを持つ生ではなくて、関わりのあるひとびとと真に関わりあう生である。」（注１０）

M．ブーバーは対話に三つの種類を挙げている。その第一は「真の対話」と言えるもので、「その担い手がそれぞれに……中略……相手の現存在と存在相とを如実に志念し、相手と自分とのあいだに生きた相互性がうち立てられることを志向しつつ、相手に向かいあう。」（『対話』220頁）場合である。第二は「実務的な対話」で、「即物的な了解の必要から話が交される」場合である。第三は、「対話的に偽装されている独白」で、自分自身を相手としながら、しかもその苦痛から遠ざかっているように錯覚している場合である。

「非対話的生」

対話的生き方を理解するために、先ずブーバーが言う第二の例の場合を見ると、これは日常生活において通常みられるものである。そこでは、「各種の隠れ場のなかに真の対話が身をひそめて」（『対話』221頁）いる。問題なのは、第三の種類で、この場合は相手を決して現前している人格と見ていないのである。非対話的生とも呼ぶことができる。これは先に述べた「我－それ」と言う三人称的関わりで、その時の我は、利用し支配する主体としての我であり、ブーバーは、「そしてこれはまったく厳粛な真実なのだ、きみよ、それなくしては人間は生きることができない。だが、それとともにのみ生きる者は、人間ではない。」（『我と汝』48〜49頁）とまで厳しく咎めている。又、別の箇所では、このような主体を個我と呼び、「個我は他のさまざまな個我から対比的に分離することによって発現する。」この「自己分離の目的は経験と利用であり、経験と利用の目的は、いわゆる ≪生活≫、すなわち人生の全期間にわたって死んでいることである」（『我と汝』84頁）と述べている。

そこまで強く主張するのは、関わりを持とうとしない生きかたは、閉鎖的であり、「けり」をつけてしまっている生き方だからである。「この人はこういう人」と決めつけてしまうと、そこには新しい出来事は何も起こらず、全ては決定している。このように＜もの＞と化した主体は、いわば「死んでいる」のと同じだと言うのである。このように＜もの＞化した世界では、単なる原因と結果の連鎖である因果律のみが支配し、自由な決断の余地は残されていない。「それの世界は、因果律によって無制限に支配されている」（『我と汝』68頁）。世界の動きが全て、（因果関係によってのみ）説明されるとするならば、自由の入る余地はなくなり、宿命が重くのしかかることになる。生命的働きである、成長、発展、何よりも新しい出会いは期待できない。こうなると、ブーバーの言うように、彼の人生はその全期間にわたって言わば余分の時であり、「死んでいる」とも言えるのである。

「対話的生」

勿論、そこまで非対話的に生きる者はなく、又、不可能でもある。しかし、こう考えて見ると、対話的生の在り様が浮かび上がってくる。「関わる人と真に関わる」とは先に述べた「我と汝」の関係を指している。具体的には実存相互の全人格的関わりであり、「真実に相手に向かうこと、要するに本質の対向が生じる」のである。（注11）この他者への彼の存在の真の対向は、相手の承認、この受容を意味している。さらに、真の対話のためには、各自が自分自らを投入しなければならない。（注12）「自己を差し出すこと」が求められるのである。その直接的関係は誠実さ真正性に基づき、仮象の入り込む余地のないものである。このような生きた間柄において、共有の実りが生じると言う。「言葉は、基本的共存在の力学によって、その深みの中に捕らえられ、開発される人々の間で、繰り返して実体的に生じてくる。」（注13）

又、ブーバーはつぎのようにも語っている。即ち、「関係の目的というものそれ自体、すなわち汝と触れあうことである。なぜなら、いかなる汝と触れあうことによっても、永遠なる生命の息吹きがわれわれに触れるからである」（『我と汝』84頁）。　ブーバーのこの主張は対話的生が互いの命の授受であり、それはなによりも永遠の汝の生命に裏付けされたものであると教えているのではないだろうか。

以上、対話的生において、汝を言う精神が生き続け、真実なる生命がそこに宿り、自己を生かし、他を生かすことを見てきた。では、このいのちを生かす根源について次に考察してゆきたい。

Ⅲ　生ける中心

「もろもろの関係の延長線は、永遠の汝において交わる。」

（『我と汝』98頁）

人間が世界にたいして、「我－汝」の関係となったとしても、いずれ「我－それ」の関係に戻ってしまう。ブーバーはこの事実を人間の運命の「崇高な憂欝」（『我と汝』25頁）とよんでいる。「あらゆる個々の汝はいったんはそれという蛹に化さねばならない」（『我と汝』133頁）のである。しかし、それらの関係の狭間に、決してそれとならない汝をかいま見ることができる。ブーバーはそれを永遠の汝と呼ぶ。「永遠の汝は本質的にそれになり得ない」（『我と汝』150頁）。換言すれば、永遠の汝は「ただ語りかけられるだけであって論述され得ない存在者なのである」（『我と汝』106頁）。

ところが、ブーバーの思想の中心とも言うべき「永遠の汝」と言う言葉に出会う時、我々はある種の戸惑いをおぼえるのが事実である。確かに永遠の汝について語ろうとすれば、たちどころに行きづまるのである。しかし、人間が永遠の汝にむかって数多くの名でもって呼びかけてきており、「それらの名においては、たんに神について何かが語られただけではなく、神への語りかけもなされた」（『我と汝』99頁）のであるならば、生ける中心への語りかけは可能になるであろう。ブーバーの次の言葉は、我々にとって大きな慰めとなる。ブーバーは言う、「神という名を忌避し、神なしと思いこんでいる者も、彼の生命の汝にむかって、自己の全存在をささげて語りかけるときには、神にむかって語りかけているのである」（『我と汝』99頁）。大切なことは神に向かって語りかけること、祈ることなのである。

この永遠の汝は、先に述べたように、「生ける神」であり、人々に語りかけ、いのちを授ける神である。

この神に似ようとする人間は、自己を神に近づけるいわば「開放体制」であるのに対して、偶像＜もの＞に服する人間は、自らものになり下がった「閉鎖体制」をなす。（注14）なぜなら、＜もの＞との関わりからは、新しい出来事は生じないからである。ブーバーが述べるように、「対話の領域には有能者も無能者もなく、ただ自己を差し出す者と、自己を留めおく者とがあるだけ」（『対話』251頁）ならば、永遠の汝との関わりにも、人は皆招かれているのである。実際、「ひとりの女を、彼女の生命を自己の生命のうちに現前化しつつ愛する人間は、彼女の眼に輝き出る汝をとおして永遠の汝の光の一筋を観ることができる」（『我と汝』141頁）のである。このように、生命肯定の原則は強く愛の原則と結ばれており（注15）、「愛する者は神を知る」（１ヨハネ４，７）のである。

この永遠の汝と人間との関係はいわば呼応関係である。あのアダムに対して生ける指が差し延べられ、アダムが生ける神に手を差し出したように、人間は今も生ける神、永遠の汝に手を差し出すことが必要である。その上、ブーバーは、「神はきみを必要としている、――ほかでもなく、それがきみの生の意味であるもののために」又、「世界が、人間が、人格が、きみが、私が存在しているということは、神的な意義を有しているのである」（『我と汝』108～109頁）。「神がこの自分を必要としている」とは大きな驚きである。しかし、我々にとって、神の呼びかけが一層身近に感じられないだろうか。一つの譬えを提示したいと思う。稲妻の放電実験のビデオを見たことがある。そこでは、上からの強い放電に対応して、下から、大地からあたかも上からの稲妻を迎えるように迎え放電が見られたのである。稲妻が成り立つためには下からの協力が必要であるのと同じく、神のいのちの伝達のためには、人間の協力が必要なのである。

最後に、神との生命的な関係を表すブーバーの言葉を引用したい。

> もしもきみが事物とその制約性のうちにやどっている生命を究めつくそうとするならば、きみは解き明かし得ないものにつきあたる。もしもきみが事物とその制約性のうちに生命がやどっていることを否認するならば、きみは無の前に立たされる。もしもきみがその生命を聖化するならば、きみは生ける神に出会うのである。
>
> （『我と汝』104～105頁）

むすび

ブーバーの著書『我と汝』は確かに難解であり、聖書的宗教背景を有せぬ者にとってはキーポイントとも言うべき「永遠の汝」の前に立ち止まってしまうことも度々である。生ける神との結び付きが弱くなっている現代人の悩みであろうか。そこで、「いのち」をキーワードにその理解の手探りを試みた次第である。対話とは単なる伝達や了解の手段ではなく、人間は根本的に対話的存在であること、対話的に生きることこそが人間の生の意味を確証する道であることを指摘したい。又、対話によってこそ人間は生きるのであり、究極的には神との対話こそ人間のいのちそのものであることをつけ加えてこの小論を終えることとしたい。

注

（1） C. Westermann, Gesis 1-11.(1976), 217頁

（2） M. ブーバー『我と汝・対話』（田口義弘訳）57頁

以下、同書の場合『我と汝』と略して本文中に記す。

（3） A. J. ヘシェル『人間とは何か』（中村匡克訳）118頁

（4） E. フロム『ユダヤ教の人間観』（飯坂良明訳）243頁

（5） G. ショーレム『ユダヤ教神秘主義』（高尾利数訳）22頁

（6） T. ボーマン『ヘブライ人とギリシャ人の思惟』（植田重雄訳）93頁

（7） 前掲書　93頁

（8） 森田弘道「いのちの始めと終わり」『聖書と教会』1988年12月号16頁

（9） A. ヴィヤール「いのち」『聖書思想事典』82頁

（10） M. ブーバー『対話』『我と汝・対話』（田口義弘訳）222頁

以下、『対話』と略して本文中に記す。

（11） M. ブーバー「人間の間柄の諸要素」『対話的原理Ⅱ』（佐藤義昭訳）111頁

（12） 前掲書　112頁

（13） 前掲書　113頁

（14） E. フロム『ユダヤ教の人間観』（飯坂良明訳）58頁

（15） 前掲書　245頁